

森まゆみ著

『反骨の公務員、町をみかく』

～内子町・岡田文淑の町並み、村並み保存』

亜紀書房（定価1,800円+税 2014.05）

昭和52（1977）年1月、松山市と日本地域開発センターは共催で「シンポジウム・松山にとって観光とは何か」を道後温泉本館の大広間で開催した。その帰路、大洲経由で内子町へ立ち寄ったのは、センターからシンポジウムに参加した高山英華理事長、木原啓吉、清成忠男、森戸哲他の諸氏、それに当時、若輩の小生であった。

八日市護国の町並みは電線が空を覆い、古い看板が溢れ、少し寂れた通りだった。だからその時の内子町の写真は1枚もない。初めてそこで岡田文淑さんと出会い、案内を受けて訪れた画家の井門敬二さんのお宅に驚いた。素晴らしい重厚な民家であった。早速、木原さん（当時、朝日新聞）が岡田さんを文化庁に繋ぎ、町並み保存のひとつの切っ掛けとなった。本書にも出てくる、内子の町並み保存センターに掲示してある色紙はこの時のものだろう。

現在では、重伝建の指定地区は全国で100箇所を越える。多くが整備の途上であるが、博物館のように物静かな町であったり、逆に派手に観光地化している地区もある。その中で内子町の町並み保存地区は、朝夕は小中学生の通学路でもあり、生活感が溢れ、町並みを訪れる人と地元の人が程よく行き交う空間となっている。

森まゆみさんと岡田さんのやりとりを読んでいくと、この絶妙な空間形成を役場職員として苦悩しながら具体的な形に仕上げていった岡田

さんの思考と行動がよく理解できる。時代的な背景をひもときながら、住民の立場で多くの保存運動に関わってきた森さんの問い掛けに対して、岡田さんが取り組んできた町並み保存や村並み保存を決して美化することなく、“反骨の公務員”として、上司や部下とも葛藤してきた気持ちと真正直に吐露されている。

住民に対しても、岡田さん独自の価値観で、町との“協力”関係や“主体性”が述べられ、それは将来のまちづくりについての厳しい注文ともなっている。それは内子町に対して、全国の町並み保存の動きについて、日本のまちづくりの展開等々に対するもどかしさからであろう。

岡田さんは全国の町並み保存運動をリードしてきた人でもある。その立場で、頑張ろうとする市町村職員や住民、関係者に対して、ある時は、歯に衣着せず叱咤激励してきた。“引き算のまちづくり”や“二足のワラジ”など、芯は心優しい岡田さんの珠玉の言葉もちりばめられている。

2004年5月、内子座から生中継というTV番組があった。岡田さんからの依頼で出演したが、ご一緒したのが森まゆみさんであった。その翌日、岡田さんの車で、森さんと3人、現在は呉市になるが、瀬戸内海の大崎下島にある御手洗の町へフェリーで渡った。古くからの風待ちの港町で重伝建地区に指定されている。

本書を読んでいると、この御手洗への旅のことを思い出す。岡田さんと森さんのゆったりとした、互いの信頼感のなかから紡ぎだされる言葉のやり取りを、フェリーのデッキで、瀬戸内の島々を見ながら、快く聞いていた時のことが髣髴としてよみがえる。

（法政大学教授 岡崎昌之）